

## 1998年鹿児島県におけるカンショの多収要因

藤田英介・上妻道紀 (鹿児島県農業試験場大隅支場)

Eisuke FUJITA and Michinori KOUZUMA Incidence Good Crop of Sweetpotato in 1998 at Kagoshima Prefecture

1998年は、鹿児島県においては、近年にないカンショ多収の年であった。10a当たり収量は、調査し始めてから過去最高の3,290キログラムであり、作況指数は120であった。しかし、この傾向は日本全土で起きたものでなく、東日本では逆に作況指数で100を下回る場所が多かった。

大隅支場では、原料用カンショを対象に1985年～1998年の間、カンショの肥大経過を調査し、その年の作況を検討する資料として用いてきた。今回この資料を用い、カンショ多収の要因について検討したので報告する。

### 1. 材料および方法

原料用品種コガネセンガンとシロサツマを供試し、4月上旬に植付け、透明マルチを用いて栽培し、8月から1カ月おきに11月まで4回掘取を行い調査した。

### 2. 結果および考察

1998年は平均(1985～1997年の平均)に比べコガネセンガンで3割、シロサツマで約4割の多収であった(第1図)。この要因については、次の2点が明らかになった。

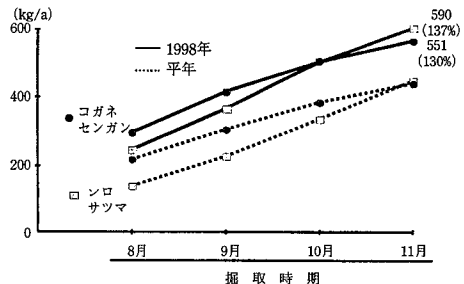
#### 1) いも個数が多い

1998年は平均に比べて、コガネセンガンで1割、シロサツマでいも個数が約3割多かった(第2図)。この原因としては、植付直後の気温が平均に比べて高く推移したため、苗の活着が良く、地上部の生育が促され、根の生育が盛んで、着いも個数が多くなったと考えられる。植付から2カ月間(4月～5月)の1日の平均気温の積算温度といも個数の関係の相関をみたところ、高い正の相関がみられたことから裏付けられる(第3図)。

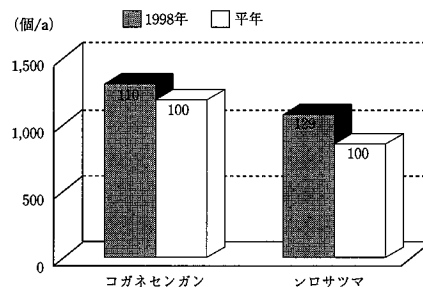
#### 2) いもの肥大が良い

1988年～1989年にかけて黒の寒冷紗を用いて遮光し、どの時期の日照不足がカンショの収量に影響を及ぼすのか試験を行い、その結果を第4図に示した。これによると、7月以降の日照不足が収量に影響を及ぼすことが分かる。このことからいもの肥大と7月以降の日照には大きな関係があるといえる。1998年の日照時間は、平均比で8月115%と例年になく高い。また地上部重が1998年は11月でも8月と比べて1割減に留まって維持していた。このことから、地上部の繁茂が十分であり、生育後期の多照によって、塊根の肥大が促されたと考えられる。

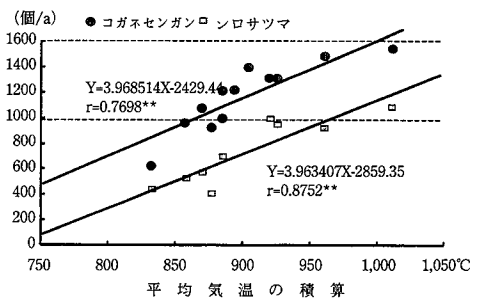
以上のことから、1998年鹿児島県におけるカンショの多収要因は、①いも個数が多い。②いもの肥大が良い。が挙げられる。



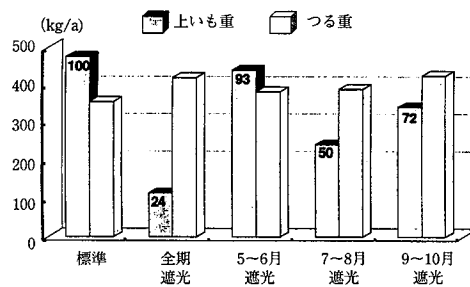
第1図 1998年における上いも重の推移



第2図 1998年における品種別上いも個数 (11月掘取)



第3図 4～5月の積算温度といも個数との相関



第4図 日照が収量に及ぼす影響 (1988～1989年)